

国内での発生が初めて確認された チュウゴクナシキジラミ

2011年夏に佐賀県のナシ生産地で日本に在来分布するナシキジラミとは異なるキジラミ類が多発生し、葉の褐変や黄化、早期落葉等の被害が見られました。(独)農研機構果樹研究所では、このキジラミ類が中国原産のチュウゴクナシキジラミであることを確認し、さらに本種の生態的・形態的特徴や被害の様態について明らかにしましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 本種の幼虫は甘露や白色ろう物質(ワックス)を多量に排出し、これらが付着した葉や果実の表面にはすす病が発生します(図1A)。葉の幼虫寄生部位は褐変し、高密度で寄生された樹では葉の黄化や多数の早期落葉が見られることがあります(図1B)。
2. 本種は、年1回発生 of 日本在来種と異なり、夏季の硬化したナシ成熟葉上にも産卵し、年間に数世代を繰り返します。なお、出現時期によって色彩が異なり(図2A~B)、夏季に発生する夏型は、体色が緑色~黄色で、通常は前翅に斑紋がありません。晩秋に出現する冬型は、夏型より大きく、体や翅脈が黒褐色であるほか、前翅後縁に顕著な黒褐色斑紋があります。なお本種冬型は、日本に在来分布するナシキジラミの越冬後の成虫に体色が似ていますが、後者には前翅の黒褐色斑紋がないことで区別できます(図2C)。
3. 形態的特徴から、本種を中国原産の *Cacopsylla chinensis* と同定し、新たにチュウゴクナシキジラミの和名を与えました。本種が加害する植物はナシ類のみです。
4. 2012年には山口県のナシ生産地でも本種の発生が確認されています。

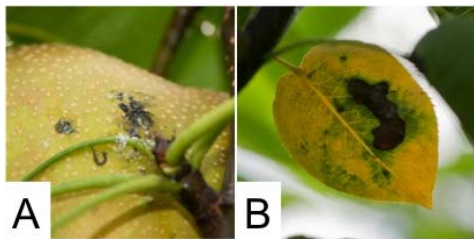


図1 チュウゴクナシキジラミによる被害の様態。
A, 果実表面のすす病, C, 葉の黄化と幼虫寄生部位の褐変。

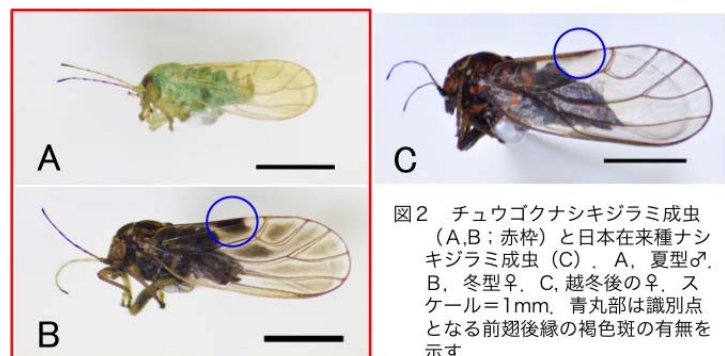


図2 チュウゴクナシキジラミ成虫 (A,B; 赤枠) と日本在来種ナシキジラミ成虫 (C)。A, 夏型♂, B, 冬型♀, C, 越冬後の♀。スケール=1mm。青丸部は識別点となる前翅後縁の褐色斑の有無を示す。

☆ 活用面での留意点

1. 本種は、中国のほぼ全域で発生しており、気候的には我が国のすべてのナシ産地で発生可能と思われます。
2. 本種の防除に当たっては、ネオニコチノイド系クロチアニジン水溶剤とニテンピラム水溶剤、マクロライド系(スピノシン系)スピネトラム水和剤が使用可能です。なお、有機リン系や合成ピレスロイド系等の殺虫剤は、本種に対する効果が著しく低いことが知られています。
3. 詳細は、農研機構果樹研究所カンキツ研究口之津(0957-86-2306)にお問い合わせ下さい。

(果樹研究所カンキツ研究領域・主任研究員 井上広光)